

[書評]

『そのまんまの日本語——自然な会話で学ぶ——』

(遠藤織枝編、ひつじ書房、2020年)

斎藤 理香

1. 「自然会話」を素材とした日本語教科書

本書は、副題に「自然な会話で学ぶ」とあるように、ドラマや小説などの創作でなく、実際に交わされた会話をデータベース化した「コーパス」から抽出した語彙や会話文を素材として用いた日本語教科書である。会話文の音声はCDに収められているが、生の音声素材は雑音が入っていたり個人情報保護の観点からそっくりそのままは使えなかったりするため、コーパスの談話資料を基に書き起こした原稿を俳優に自然に読み上げてもらったという。

コーパスとは、簡単にいうと、大規模に収集され電子化された大量の言語データのことで、たとえば国立国語研究所・言語資源開発センターのウェブサイト¹⁾には、「日本語話し言葉コーパス」「日本語日常会話コーパス」「昭和話し言葉コーパス」「名大会話コーパス」「日本語諸方言コーパス」など音声言語を基にしたコーパスのほか、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」「国語研日本語ウェブコーパス」「日本語歴史コーパス」のような文字言語に関するもの、さらに「中国語・韓国語母語の日本語学習者横断コーパス」(発話データ)「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(話し言葉と書き言葉データ)のように日本語学習者をインフォーマントとしたコーパスも存在する。本書で使用されたのは、「現代日本語研究会」がインフォーマントに職場その他の日常場面で会話を録音してもらい、その音声を文字化した談話資料である『女性のことば 職場編』(1997)、『男性のことば 職場編』(2002)——上記国立国語研究所ウェブサイトの一覧には「現日研・職場談話コーパス」として掲載されている——と、さらに同研究会が『談話資料 日常生活のことば』

(2016) で収集したデータも加えた1990年代から2010年代の約20年にわたって調査・収集された会話コーパスである。ちなみに、編者を含め8人の執筆者全員が同研究会のメンバーで、日頃から日本語、日本語教育、ことばとジェンダーなどにかかわる研究・執筆活動を行っている。

本書で使われている最初の会話コーパス(1997)の談話資料が収集されたのは、日本語教育においてコーパスが活用され出したという1990年代末ごろ(砂川 2011: 4)よりも以前のことだ²⁾。砂川は、コーパスの利点を「母語話者の直観でも気づかない言葉の使い方に気づかせてくれるところ」(2011: 8)だと述べているが、本書の編者も「はじめに」で、既存の教科書に書かれた会話が実際の発話と随分とかけ離れていることに気づいたことが執筆の動機だと説明している。その一例として、現在ではよく指摘されることだが、会話文で見受けられる「～かしら」「～だわ」などのいわゆる「女性語」とされるような言葉遣いを女性が実際にしているのかという疑問があげられる。編者が収集にかかわったコーパスには、「女性語」が繰り返し現れる事例は出てこなかったという。

このような、日本語とジェンダーにかかわる「気づき」のほかにも、発話した本人も無自覚のままの、また既存の日本語教科書では扱われてこなかったくだけた話し言葉を、本書では「自然会話のことばの音変化」として紹介している。その中で、評者が既存の日本語教科書ではあまり見かけてこなかった事例をあげてみよう。まず、「1 音が脱落することば」(p. x)の例で、「～ています→てます」「～ていて→～てて」などのように、「い」が抜ける一般的な例に加えて、「～てほいんですけど→～てほしんですけど」のように、たしかに実際の会話では「い」が聞こえない言い方もされると気づかされるものや、「やすい→やっす」のように相当にくだけた形のものがある。また、「3 音の変化」(p. xii)の例では、「家の中→家ん中」のように「の→ん」になる例や、「わからない→わかんない」「どうするの→どうすんの」のように「ら/る/れ/ろ→ん」に変化する、これまでの教材にも見られる事例のほかにも、「40ぐらいになっても→40ぐらいんになっても」のように、直前の音の影響を受けて「に→ん」と発音された例も取り上げられている。実際に発話された音声をここまで忠実に文字化して教材に採用したケースは、これまでな

かったと言っていい。

一方で、録音された音声と本文の会話文は一言一句齟齬のないように一致させているわけではなく、会話の内容理解を妨げるような聞き手のあいづちや発話の重なりがある音声は、読みやすさを優先して、あえて文字化していないという (p. vi)。つまり、語彙や句レベルでの音変化は細かく記述することで「聞こえ」を意識化させ、談話レベルでは会話の意味内容を理解させることに重きをおいている、といえる。このことは、「はじめに」で、「テープでは自然な会話の流れを聞き取ってください。本文では文字で内容を理解してください」(p. vii) と、自然会話を聞くこと、会話文を読むこと、両方の学習活動を推奨していることとも符合する。この教科書はしたがって、聴解用、読解用などの技能別の教材としても使えるだろうが、次の節で述べるように、聞く・読むを中心に、4技能をバランスよく習得させる総合教材としても利用できそうである。

2. 「自然会話」テキストの内容と使用例

本書は、テーマごとに13課で構成され、各課に会話文、語彙リスト、表現項目、自然会話の特徴（説明文）、話し合おう（ディスカッションのための問い）、文化ノート、または会話スクリプト（3、8、10、11課のみ）という項目がある。おおよその内容がわかるように、各課のタイトルを以下に列挙する。なお、どの課からも学習が始められるようになっているという。

第1課 桜の開花／第2課 本が大好き／第3課 美容院にて／第4課 パワフルなお母さん／第5課 ラジオ体操／第6課 就活／第7課 「会社」って「宗教」？／第8課 ホームシック／第9課 古着とおしゃれ／第10課 九州の女性／第11課 驚くべきコミュニケーション術／第12課 節分と恵方巻き／第13課 卒論コロンブス

この中で、特にジェンダーに関連するテーマを取り上げている「第4課 パワフルなお母さん」と「第10課 九州の女性」を少し紹介してみたい。第4

課は、久々に会った30代の幼なじみ「あゆみ」と「かずと」の会話で、在宅で介護関連の事業を立ち上げた母親についてあゆみが「うちのお母さん、パワフルです」と言ったところから、このタイトルがつけられている。会話は全体として、この母親の人柄もしくは性格を語る流れで進み、最後のほうでは、母親が自分を「女の子の子した女の子に育てたくなかったらしい」と話すあゆみのことばから、当の彼女の性格までが読み取れるような内容になっている。「第10課 九州の女性」では、九州に出張経験のある会社の同僚と思しき30代と20代の会社員「池田」「山本」「吉川」「岩山」の4人が、九州で出会った女性たちについて、意外性による驚きも交えつつ話し合っている。例えば話し方や酒の飲み方などを見聞したかぎり、表面はいばっているように見える男性よりも、実は女性のほうが数段強いのではないかという結論に、4人の「九州の女性」のイメージが集約されていく。この二つの課の会話では、日本の女性についての一般的なイメージが裏切られるようなエピソードが取り上げられている。それが比較的若い世代の会話であることから、日本社会におけるジェンダー認知の変容が進んでいることも表わすことになる。これらの課は、そういう仕掛けとしても機能している。

ジェンダー関連のテーマに直接触れていなくとも、実はこの教科書は全体を通して日本語とジェンダーの変容を訴えているともいえる。そもそも自然会話を収集するきっかけとなったのは、いわゆる教科書会話と実際の発話とのギャップが激しかったからで、それもジェンダーによる言葉遣いの差異が必要以上に強調されていたことが原因である。本書には第1課から第13課まで、どの課の会話文を見ても、性別がやたらと強調されるような言い回しは一切見られない。話し手は、たとえば第4課のように「あゆみ」「かずと」と名前で性別がわかる場合もあるし、第10課のように苗字だけで性別がわからない場合もある。いずれも会話の話し手の性別は明記されておらず、あえて作り手がそうしているからなのだと思うが、書かれた会話文を読んだだけでは、女性が話しているのか男性なのかは判然としないことがわかる（音声を聞けばわかるかもしれないが）。つまり、日本語の自然会話にはジェンダーの違いが思ったほどにはないということが、この教科書を使う教師にも学習者にも「気づき」として伝わるのである。

日本語レベルについては、語彙リストについて「中級以上で習うことばを載せてい」（p. xiii）ると明記してあり、おそらく日本で使われる場合は中級レベル以上のクラスで、欧米圏で使われる場合は、もちろん教育機関によって異なるが、評者が勤務するアメリカ中西部の州立大学で使う場合を想定すると、上級レベル以上のクラスで使うのが適当かと思われる。

個人的には、メインではなくサブ教材として、特に聞き取り練習用に使ってみたい。本書でも紹介されているように「CD を耳で聞いてから本文を読む」（p. xii）という順序で、学生が何度か聞いて「何について話しているか」を話し合い、また CD を聞きながら、わからない語彙や表現を書き出し語彙リストで確認してから、その後に会話文を見て、さらにもう一度 CD を聞くというように、「自然会話」になるべくそのまま耳から触れるような形で導入していくといいだろう。自然会話の特徴や文化ノートは、すらすらとは読めないであろう学生の現状のレベルを考慮して、学生が自分で読むというより、評者（教師）が解説する形で利用しようと思う。

もし、学習者の日本語レベルが相当高い場合は、評者が自分で使うと想定した場合は逆に、各課の説明文もすべて読み教材として利用し、その後に学習者同士でディスカッションをしたり、感想や意見をまとめた作文を書いたりするなど、聞く・読む・話す・書く、の練習を総合的に取り入れた使い方ができると思う。

3. 「自然会話」コーパス教材開発の観点から

冒頭、本書を「自然会話」を素材とし、かつ「コーパス」を用いた日本語教科書である、という表現の仕方で紹介した。それには多少とも理由がある。そのことを最後に述べておきたい。まず本書は、談話資料「コーパス」から会話文を採用していると言われてはいるものの、「コーパス」を最大限に利用して作られた教材だと銘打ってはいない。そのことは、作り手のそのような文言がないというだけでなく、教科書の目的、特に語彙リストや表現項目の選定についての説明などを読めば明らかである。「コーパス」とは、繰り返しになるが、大規模に収集され電子化された大量の言語データであり、この

ようなデータを日本語教育に利用しようとする場合、たとえば自然会話の中で非常によく使われる語彙や表現を抽出し、それらを材料に教科書開発をするという方法がとられるだろう。つまり何らかの統計的な処理を施し、その結果を根拠として頻出する語彙や表現を教科書に採用し、学習者に効率よく学習してもらう、そのような目的でコーパスを使用することが想定されるわけである。本書はしかしながら統計的手法は用いず、あるいは統計的手法で「自然会話のことばの音変化」の一覧を作成していたとしても、そのことは明記せず、たとえば語彙リストの語彙選定の根拠については、中級以上で使われるという以上の説明はしていない。これらの語彙が中級における頻出語彙なのかどうか、そのような情報も知りたいところではある。このような観点から、本書はコーパスを使用しつつコーパスによる教材開発という目的で作られたわけではないという特徴をもつといえる。ただ、そのような指摘をした上でも、本書の最大の強みは、日本語の自然会話を聞き、読むという学習を通じて、またジェンダー認知の変容を知ることなどを通じて、現実世界の日本語とジェンダーとの関係を体感できるところにあることを強調しておきたい。

【注】

- 1) <https://clrd.ninjal.ac.jp/corpus-list.html>
- 2) 談話資料『女性のことば 職場編』(1997)は、日本語教育にかかわっている執筆者が多いが、日本語教育を目的として作られたわけではない。

【参考文献】

- 現代日本語研究会 編 (1997) 『女性のことば 職場編』 ひつじ書房。
現代日本語研究会 編 (2002) 『男性のことば 職場編』 ひつじ書房。
現代日本語研究会 編 (2016) 『談話資料 日常生活のことば』 ひつじ書房。
砂川有里子 (2011) 「日本語教育へのコーパスの活用に向けて」『日本語教育』150号, pp. 4-18.

(さいとう りか・ウェスタン・ミシガン大学教授)